

リーダー像は学生が決める

江戸川大学 学生リーダー制度 大学の年間行事に協力

リーダーシップの重要性が叫ばれて久しいが、学生生活の中に組み込まれたプログラムとして取り組んでいる大学は多くはない。千葉県流山市の江戸川大学(小口彦太学長)の「学生リーダー制度」は、大学の制度ではあるが、学生が自律的に運営する、リーダー育成プログラムにもなっている。担当するメディアコミュニケーション学部の廣田有里教授と林香織准教授に、この取り組みを聞いた。

廣田教授に聞く 林准教授

○江戸川大学のリーダーとは何か
学生リーダー制度は、教育理念「人間陶冶」を体現する「やさしさ」や「教養」を身に付け、学生の「手本」となることを目的として、2008年頃から始まった正課外プログラムである。当初は、自己啓発として礼儀作法等を学ぶ中で、オーブンキャンパスで高校生

を案内したり、流山市民まつりのボランティアをしたり、能力アップ研修などのプロジェクトを行っていたが、学内での認知度は低く、教員の指示に受動的な取り組みが多かったという。

そこで、廣田教授と林准教授は、改めて「リーダーとは何か」を考えさせた。学生たちが出した結論は、「学生リーダーの活動をを通して人と人を繋げていくこと」だった。「ガクリコネクト」と名付けたこのコンセプトに向けて、一つひとつのプロジェクトの意義や意味を自ら考え、目標を定めて実行するようになった。「教員としても、学生リーダーが他の学生から頼られ、相談される存在になるため、議論を促進し、まとめ、記録できる能力を身に付けさせる研修を考えました」と廣田教授は振り返る。

せています。代表者を決める年もあれば、プロジェクトごとに決めることもあります。3年生が中心的存在ですが、それも教員から働きかけたわけではありません。年間ス

学生リーダーは、全学部学科の全学年から多様な学生が集まる。こうした中で一つの目標に向かってプロジェクトを進めていくのも大きな特徴であるという。



廣田有里教授(左)と林香織准教授

学生リーダーは、6学科全学年から20人前後が集まる。大学組織図では基礎・教養教育センター付きで、新入生がスムーズに大学生活に馴染む支援を行うことを主たる目的としており、そのために大学から予算がついている。1年次の履修登録後から加入でき、4年次も就職活動が終わると手伝いに来る。活動は、基本的に年間スケジュールに沿って、先述の通りオープンキャンパスのスタートや流山市民まつりボランティア等を行う。

学生リーダーの参加について面談はあるが条件はない。「学生リーダーの中で代表者を決めるかは、基本的には彼らに任

談室」は、4月の3週目まで学生リーダーが常駐する相談室を開設し、履修科目の選び方や登録について相談にのる。「この相談室が毎年盛況で、手いっぱいになってきました。そこである年、学生リーダーから、まとめ時間割作成相談会を開こうとの提案がありました。もっとも、これも約300人が詰めかける盛況行事となりましたが、オープンキャンパスでも、高校生を相手に学生リーダーたちが大学の説明をする。

1つが、教員の介入のタイミングである。打ち合わせや準備をはじめ、意思決定は基本的に学生に任せている。しかし、手詰まりがあったときは指摘をし、頼られれば相談に応じる。しかし、一点だけ必ず介入することがあると廣田教授。「各プロジェクトの終了後は必ず反省会を開き、教員から成功か失敗かを明確に伝え、失敗した点は改善してもらいます。学生だけでなく失敗してもうやむやになったり、お互いに批判し合って次に生かされないこともあるかもしれません。従って、成功・失敗について明確にすることは教員から行います」。こうした絶妙な介入が学生の主体性を失わずに、しかし学生だからと甘えさせない構造にもなっている。更に毎月のようにプロジェクトを

この取り組みから得られる知見は2つある。

○先輩に憧れて...
学生リーダーの大きな活動として、新入生向けガイダンス「アラカルト」と履修相談室、時間割作成相談会がある。「アラカルト」は、約20分、新入生の前で学生生活を紹介する。「履修相

2つが、大学にとっての意味である。履修相談室は教務課との連携で行われているが、教職員か

ら直接指導されるより、学生リーダーが相談にのることで、新入生の相談に対する心理的垣根を下げていくとも言える。「中には明日から何をすればいいのかわからない、という新入生もいます。事務窓口においてと

ら直接指導されるより、学生リーダーが相談にのることで、新入生の相談に対する心理的垣根を下げていくとも言える。「中には明日から何をすればいいのかわからない、という新入生もいます。事務窓口においてと

この学生リーダーの取り組みから、江戸川大学のリーダー像も確立でき

るのではないだろうか。「ぐいぐい引っ張っていくというよりは、親しみが持てて自律的に問題を乗り越えていける人材でしようか」と廣田教授。

それは実証に基づいた結果であり、江戸川大学の教育の強みとして研ぎ澄ましていけるのではないだろうか。

果であり、江戸川大学の教育の強みとして研ぎ澄ましていけるのではないだろうか。